

サケの放流と生態について（その1）

【サケの放流について】

県内の主要河川では、サケ親魚の採捕と稚魚放流が行われています。放流事業を行っているのは、大北川・久慈川・那珂川と那珂川第一・鬼怒小貝の4河川の漁業協同組合で、今年度は平成12年1月から3月にかけて合計約380万尾の稚魚が放流され、近年安定した放流量が維持されています。（図-1）

サケは、産卵時期になると生まれた河川に戻ってくることで有名ですが、北太平洋海域で成長し産卵のために川に遡上してきた親魚を、関係漁協が9月から12月に捕獲し（図-2）人工受精を行い、漁協独自のふ化場で1g稚魚に成長するまで飼育し放流します。

最近では学校教育の一環として、漁協から発眼卵を譲り受け学校や各家庭で飼育し放流する活動が盛んに行われており、生命の誕生や自然環境の重要性など、情操教育に大きな役割を果たしています。

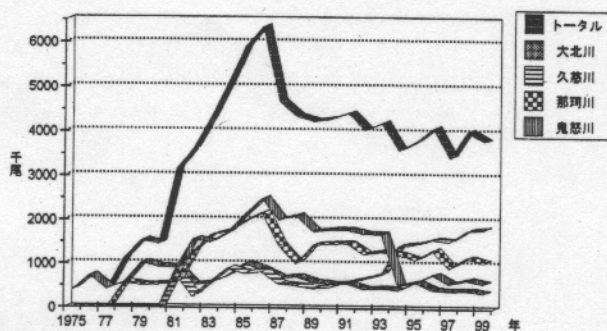


図-1 放流尾数の推移

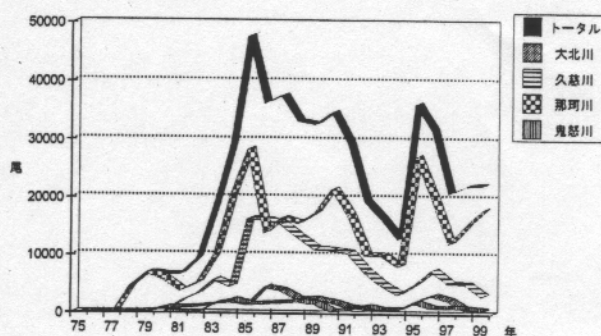


図-2 河川での捕獲尾数の推移

【サケ親魚の生態について】（その1）

里美支場では、遡上してきたサケ親魚のウロコや魚体測定の結果から年齢や体長組成・成熟度などを把握し、放流事業の効率化を図るための調査を毎年行っています。

今回は、「河川別の年齢組成」について紹介します。ウロコには、木の切り株のような年輪が刻まれており、採捕されたサケの年齢を知ることが出来ます（図-3～6）。採捕河川や特異的な年の組成は多少異なりますが、全体的な推移をみると2～3歳の若年魚が減少し、4～5歳の高齢魚の割合が高くなっています。回帰サケ親魚の高齢化現象は、全国的にもみられています。

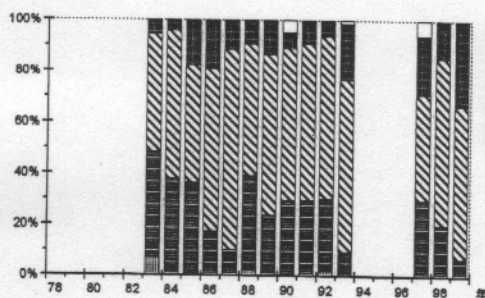


図-3 大北川の年齢組成の推移

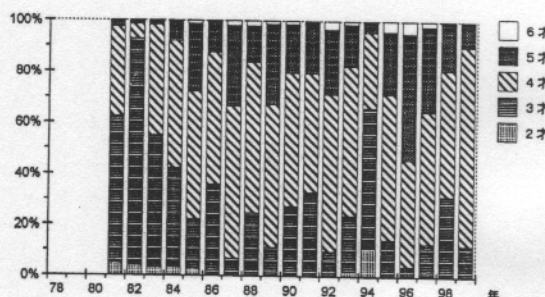


図-4 久慈川の年齢組成の推移

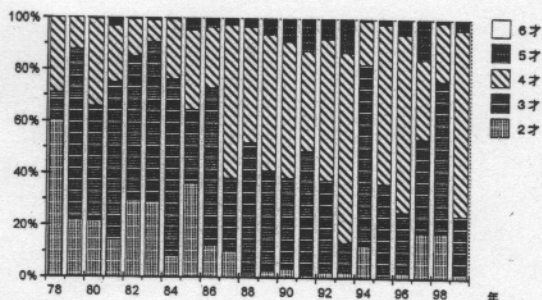


図-5 那珂川の年齢組成の推移

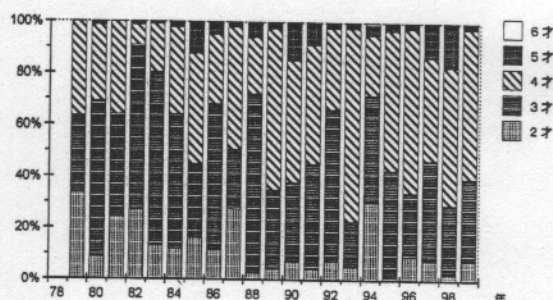


図-6 鬼怒川の年齢組成の推移

担当：里美支場（TEL：0294-82-2448）

茨内水試図

茨城県内水面水産試験場（TEL：0299-55-0324）